



[書評論文]

東谷 護 編著

『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』

(せりか書房, 2014年) 293頁, ISBN978-4-7967-0336-9

高 橋 聡 太

東京芸術大学大学院博士課程

sotatkhs@gmail.com

(受理: 2015年1月26日, 採択: 2015年1月29日)

本書は日本のポピュラー音楽を歴史的側面から研究した論文を集めた一冊である。編著者の東谷護は、これまでも『ポピュラー音楽へのまなざし—売る・読む・楽しむ』(東谷編 2003)、および『拡散する音楽文化をどうとらえるか』(東谷編 2008)と、日本のポピュラー音楽研究の成果をまとめた領域横断的な論集を編んでいる。さまざまな学問領域から主に同時代的なポピュラー音楽の諸問題を取り上げた両書に対し、本書の特色はやや古い事例をとりあげ、それぞれの足跡を丹念にたどることにより、現代にまで通底する普遍的な議論を組み立てている点にある。

まずは本書の射程を俯瞰するため、以下にその目次を引く。

- 第1章 エドガー・W・ポープ「日本のポピュラー音楽にあらわれる「中国」—明清楽の変遷を手がかりとして」
- 第2章 輪島裕介「「カタコト歌謡」から近代日本大衆音楽史を再考する」
- 第3章 遠藤薫「〈盆踊り〉と YOSAKOI の間に—グローバル／ナショナル／ローカルのせめぎ合う場としての現代祝祭」
- 第4章 周東美材「「未熟さ」の系譜—日本のポピュラー音楽と一九二〇年代の社会変動」
- 第5章 永原宣「《東京行進曲》から探る「アンクル」な日本の再発見」
- 第6章 安田昌弘「文化のグローバル化と実践の空間性について—京都ブルースを事例に」
- 第7章 東谷護「ポピュラー音楽にみる「プロ主体」と「アマチュア主体」の差異—全日本フォークジャンボリーを事例として」

各論考での主題を編年順に並べると、19世紀末から20世紀初頭にかけて日本で受容された明清楽（ポープ）、1918年の『赤い鳥』創刊後に萌芽した童謡運動以降の子どもに関する音楽（周東）、1929年にレコードが発売された流行歌《東京行進曲》（永原）、1931年のバートン・クレーン《酒がのみたい》に端を発する外国語風の発音を用いた歌謡曲（輪島）、第二次世界大戦をはさんでやや時代をおき、1970年前後に岐阜県で開催された全日本フォークジャンボリー（東谷）、1970年代初頭から花開いた京都ブルース（安田）、1992年に北海道で始まったYOSAKOI（遠藤）となり、全体でおよそ一世紀以上もの広がりがある。

このうち、特に戦前の事例に関しては、ポピュラー音楽と捉えることに違和感を抱く向きもあるだろう。明治から1945年の第2次世界対戦終結までを近代、占領期以降を戦後、そして主権回復後の日本が経済的な自立を遂げて以降を現代として扱う画一された教科書的歴史区分からすると、戦前の明清楽・童謡・流行歌などは近代音楽史研究の対象でもある。さらに、東谷が本書の序文で指摘しているとおり、ポピュラー音楽研究が本格的に制度化されたのは1980年代末以降のことだ（東谷 2014a：6）。そこで主に組上に載せられたのは、かつて「価値の低い、語るに及ばない」（同前）とみなされていた、戦後以降の比較的新しい音楽だった。それゆえか、ポピュラー音楽研究を「いま」ヒットしている」（前掲書：7）はやりの音楽を対象とする学問領域として捉える傾向は今なお根強いようだ。

しかし、ポピュラー音楽研究の意義は決して卑近な事例を扱えることに限られるわけではない。その真価は、リチャード・ミドルトンが主張したように、様々な音楽文化の流動性や重層性を前景化させることにある（Middleton 1990）。とりわけ歴史的視点による研究は、クラシック、非商業的な芸術、伝統芸能、民族音楽など、「ポピュラー」の対立項としてその存立基盤がしばしば自明視されるカテゴリーの布置や、前段で述べた画一的な時代区分が、さまざまな実践と批評のなかで再編される過程をあきらかにし、諸文化に接するわれわれの思考が何に囚われているのかを露呈させる。その上で、かつて「ポピュラー」であったはずの忘れられた音楽文化が、いかなる社会的文脈のなかで意味づけられ、どのように経験されていたのかを論じることは、きわめて有効な手段である。

以下、本書の各論文を収録されている順に概括する。通常の学術論文や論文集とは異なり、本書は規定枚数を設けていないため、各論文の長さにはばらつきがある。また、一口にポピュラー音楽を対象とする歴史的研究といっても、各論文で採用されている調査方法はそれぞれ異なっている。そのため、すべての論文の論証過程をバランスよく詳細に検討することは困難である。そこで、本稿では各論文の骨子となる論点を簡潔に述べた上で、特に輪島論文と周東論文を例にとり、本書で扱われた歴史的諸問題が現代の読者にとっていかなるアクチュアリティを持つのかを強調することにより、本書の意義を主張したい。

第1章のポープ論文は、一般的に西欧化の過程として語られる日本の近代化に、中国文化がどのような影響を与えていたのかを、明清楽と呼ばれる音楽に見出された記号的意味の変遷に着目して論じている。中国文化は江戸時代以前から長らく中流以上の階級の趣味として受容され、明治初期に受容された明清楽も、当初は上品な音楽として親しまれた。ところ

が、1894年の日清戦争以後、敵国である清を貶める風潮を受け、明清楽にもネガティブなイメージが付与される。こうして中国風のポピュラー音楽は一時的に廃れたものの日本が帝国主義的な政策をとった大正期から昭和初期にかけて再興し、明清楽の流れをくむ支那楽が大陸への勢力拡大を図る日本である種の理想郷の表象に利用された。近代に受容された明清楽は、同時期に急速に流入した西洋音楽のシステムと連動し、現在では日本のポピュラー音楽の本質的特徴とみなされるヨナ抜き長音階の成立にも少なからぬ影響を与えているという。また、ポープは、こうした異国の音楽に付与される記号の推移を「未知→エキゾチック→普通→懐かしい→忘れ去った」（ポープ 2014：13）と五段階に分けた経時的モデルを提唱して検証している。

第2章の輪島論文の主題は、外国語風の発音と語彙を用いた日本語歌謡の系譜だ。輪島はこの概念を「カタコト歌謡」と名付け、日本で外来の音楽文化が受容される際にはカタコトによる歌唱が通史的かつ通ジャンルの的に現れると主張する。論文中では特に1930年代に焦点を絞り、バートン・クレーン、川畑文子、ディック・ミネを主な事例として、各歌手の伝記的事実やレコードの制作背景をふまえつつ、主にアメリカ由来の英語なまりを強調した歌唱方法がどのように受容されたのかを当時の評論をもとに分析し、レコード歌謡揺籃期からカタコト歌謡が出現していたことをあきらかにする。しばしば差別的なほどに文化的ステレオタイプを強調し、あえて俗悪な発音と語彙を用いるカタコト歌謡は、えてして「正統」な音楽史からは除外されてしまう。しかし、輪島が論じるように、耳慣れぬ言葉を用いたパフォーマンスからは多言語が絶えず混淆する文化実践の本質を垣間見られる。また、各時代においてどのような訛りが「カタコト」とみなされていたのかを考察することは、どのような言語の用法が正統化されてきたのかを逆照射する上でも有益だろう。

第3章の遠藤論文は、1992年に北海道札幌市で創始されたYOSAKOIソーランを事例に、参加者のアイデンティティが「グローバル」・「ナショナル」・「ローカル」という3つのタグへと重層的に帰属する現代的な祝祭の様相を多角的に観察する。中心となる事例こそ本書の論文中では最も新しいが、やや実証性に欠くものの仏教の伝来にまで「ポピュラー」な歌と踊りの歴史をたどった大胆な構成だ。一見してローカルな伝統のようにも思える盆踊りやよさこいなどが、実際には多種多様な文化の「Remix」（遠藤 2014：104）によって成立したものであるとし、さまざまな要素によって複合的に成立される空間として祝祭を捉えている。さらに国際化と情報化の進展した現代では「YOSAKOIソーラン」に代表されるように、外来の音楽を用いつつ（グローバル）、「和」のテイストが強調され（ナショナル）、同時に地域コミュニティを活性化させるような（ローカル）、きわめて複雑なアイデンティティを構成する空間が出現したという。

第4章の周東論文では、音楽史において受け手としても送り手としても周縁化されてきた「子ども」に焦点をあて、20世紀のメディア変容のなかで前景化した子どもの身体性や媒介性に着目し、その「未熟さ」に価値を見出す心性の歴史がメディア論的に検討される。特に、近代家族の成立とともに子どもが新たなメディアの消費者となった1920年代の社会変

動を中心に持ち上げ、子どもをターゲットとした商品展開や、印刷媒体である雑誌をつうじて子どもの芸術性を開発しようとした北原白秋らの童謡運動、レコード文化の揺籃期から活躍した童謡歌手たちの活動など、豊富な事例をもとに日本のメディア文化が常に子どもを注視しながら展開してきたことを説得的に論じている。「未熟さ」を尊重する傾向は、ある程度は慈愛や親しみから生まれるものかもしれないが、その背後ではそうした心情を近代国家や資本主義体制の成立基盤となる家族観の確立に利用せんとする権力がはたらいている（周東 2014：173）。ありきたりな子ども観の相対化は、近代社会そのものを抜本的に批判する可能性を秘めていると言えるだろう。

第5章の永原論文は、1929年に日本ビクター蓄音機より発売された《東京行進曲》をめぐる当時の批判的言説を分析し、ポピュラー文化のネガティブな側面を検討する。西條八十が作詞、中山晋平が作曲を手がけ、佐藤千夜子が歌った《東京行進曲》は、これまで外国の音源や日本の伝統芸能のレコードを発売していた日本国内のレコード会社が、初めて主体的に制作した「オリジナル」の楽曲であり、日本のレコード歌謡史において画期をなす一曲として位置づけられている。しかし、当時の流行や盛り場の文化を反映させたこの楽曲は、日本の文化的エリートから低俗なものとして非難された。永原は、《東京行進曲》を声高に批判した上流階級の人々の胸中には、この楽曲の流行の背景に自分たちの存立を脅かす中流階級の台頭への危惧があったと指摘し、ポピュラー文化を低俗的にみならず言説空間を各階級の価値観が衝突する「文化戦争」（永原 2014：205）の場と捉えている。ポピュラー音楽の俗悪さを認識することは、ポピュラー文化がもつインパクトを両義的にとらえ、いわゆる「クール・ジャパン」のような近視眼的日本文化礼賛に一石を投じることにもつながるはずだ。

第6章と第7章は、主に文献資料に基づくこれまでの章とは異なり、いずれも聞き取りをもとにした質的調査によって、ポピュラー音楽の理論的諸問題についての議論を深めている。

第6章の安田論文では、京都のブルース文化を事例に、特定の音楽ジャンルが構成するグローバルな空間の多元性を腑分けしている。これまで文化的グローバリゼーションの過程は、グローバル／ローカルの二元論をもとに、前者が後者を支配する単純な構造としてまとめられがちであった。安田は空間論の先行研究をもとにこの短絡的なモデルを分節し、質的調査によってあきらかにした京都ブルースの展開プロセスの分析に援用する。京都の土地柄、そこでブルースを実践する人々、舶来のレコードやミュージシャンなど、様々な要素が交錯する京都ブルース文化の生成過程は、ともすれば「アメリカの黒人文化であるブルースが京都に根付いた」といった単線的な図式で語られてしまう文化のローカル化を、より多元的かつ複方向的な現象として捉え直すための視座を提供してくれる。

第7章の東谷論文が議論するのは、プロ／アマチュアという、これも同様にポピュラー音楽文化のあいだでしばしば自明視されてきた二項対立である。多くの場合、ポピュラー音楽の歴史はヒット曲を流通させるプロ側を中心に語られるが、さまざまな実践の場をつぶさに

見ると、そこではアマチュア的な志向を持つ人々もまた音楽文化の根底を支えていることがあきらかとなる。東谷は、1969年から1971年にかけて開催され、日本フォーク史のメルクマールとなった「全日本フォーク・ジャンボリー」の運営に携わった人々への綿密な聞き取り調査を実施している。当事者たちの証言をもとに、舞台裏を支えた人々の熱意や、イベントと地域との関係性を克明に描き出し、さまざまな協同と対立のなかでどのようにアマチュア的な主体性がつくられたのかを論じている。アマチュア主体のアイデンティティ形成を追うだけではなく、当事者たちの回想や貴重な写真資料などをもとに歴史的なイベントの実態を再構成する手法は、ポピュラー音楽の質的調査の可能性を十分に示すものだ。

すでに本稿の冒頭で述べたように、本書の最大の魅力は、どの論文も他の地域や時代にまで敷衍できる議論を展開していることにある。例えば、輪島論文は主に戦前のカタコト歌謡を論じたものだが、外国語の発音と語彙を用いた日本語での歌唱が、キャロルやサザン・オールスターズなど1970年代以後のロック受容においても反復されたことにふれている。カタコト歌謡的なロックの歌唱スタイルは、現在も一種の定番となっており、その一例として輪島は脚注にて近年お笑いの分野で知られている〈T-BOLANを知らない子どもたち〉と〈ジェットシー〉を紹介している。前者はT-BOLAN、後者はBLANKEY JET CITYとモデルの違いこそあるが、両者とも日本語の歌詞に英単語を織り交ぜ、あからさまにアメリカかぶれなカタカナ英語の発音で歌う、日本のロック・バンドの様式をナンセンスなほどに強調している。本来であれば「かっこよさ」を狙ったカタコト歌謡の様式を過剰に踏襲することが、ありきたりな「ダサさ」に直結して笑いとなり、広く受け入れられたという事実は、昭和初期から続くカタコト歌謡の流れを汲む日本のロック・バンド特有の歌いまわしが、スタンダードなものとして広く認識されていることの証左となる。われわれがテレビで何となく目にしているお笑い文化のうちにすら、ポピュラー音楽における多言語混淆の軌跡を読み取ることができるのである。

また、周東論文では、「一九二〇年代の社会変動」と明記された題目を一見しただけではやや分かりにくいだが、1910年代に設立された宝塚少女歌劇から2010年代のももいろクローバーZに至るまでの、世紀をまたぐ多種多様なポピュラー音楽文化を議論の対象とし、各時代ごとのメディア変動に対応してどのように「未熟さ」が立ち現れ、それがいかに消費されてきたのかを概括している。こうした野心的な試みは、カタコト歌謡のヴァリエーションとも言えそうな舌足らずな機械的発音を特徴とする初音ミクなどのボーカロイド文化、登場する役者の歌・踊り・演技などの技術的な拙さがかえってファンの熱狂をよぶ『テニスの王子様』に代表されるマンガ原作つきミュージカルなど、近ごろ領域横断的に学術的な関心を引きつつある様々な新興のポピュラー文化を、より広く深い文化史的時間軸のなかに位置づけて議論する上で、きわめて重要な視座を提供してくれる。

ここまで紹介してきたように、本書の論文はいずれをとっても特定のジャンルにとどまらず、より広い「問い」へとつながる可能性を秘めているが、最後に2つだけ可能であれば本書により詳しく補足してもらいたかった点を指摘したい。

第一に、長い歴史的な時間軸を設定した多角的な論集であるからこそ、ポピュラー音楽の歴史的研究における方法論の議論にも紙幅を割くべきだったように思う。本書で最も古い事例を扱ったポープ論文が、ディスコグラフィアーとしてYouTubeにアップロードされたSP盤音源を参照していることは、きわめて現代的な傾向だと言える。音と映像のデジタル・アーカイヴが公的にも私的にも進んでいる昨今にあっては、過去のさまざまな音楽と人々との相対的な距離は急速に変容している。文献資料にもとづくオーソドックスな研究や、聞き取りにもとづく質的な歴史調査の方法論はもちろんだが、新たに利用可能になった視聴覚的史料をどのように研究に組み込むべきなのは、今後さらに慎重に議論するべきだろう。

もう一点は、本書のほぼ全論文でも言及されている、歴史的研究を進める上で「日本」という地理的枠組を設定することの限界である。文化実践は近代的な一国史の範疇を容易に超越し、その経験もまた様々な言語圏をまたいで、一種の共有財産のように蓄積されていく。その実態を知るためには、ポープ論文や輪島論文でも言及されているように、国家ではなく海洋を中心に据えた文化史の構築が必要だろう。本書によって日本から発せられた「問い」が、海をこえて響きわたることを期待する。

参考文献

- 遠藤 薫, 2014, 「〈盆踊り〉と YOSAKOI の間に—グローバル／ナショナル／ローカルのせめぎ合う場としての現代祝祭」, 東谷護 (編著) 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房, 81~133 頁。
- 周東美材, 2014, 「「未熟さ」の系譜—日本のポピュラー音楽と一九二〇年代の社会変動」, 東谷護 (編著) 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房, 135~179 頁。
- 東谷 護 (編著), 2003, 『ポピュラー音楽へのまなざし—売る・読む・楽しむ』 勁草書房。
- (編著), 2008, 『拡散する音楽文化をどうとらえるか』 勁草書房。
- (編著), 2014, 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房。
- 東谷 護, 2014a, 「はじめに—ポピュラー音楽研究の〈いま〉」, 東谷護 (編著) 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房, 6~8 頁。
- 東谷 護, 2014b, 「ポピュラー音楽にみる「プロ主体」と「アマチュア主体」の差異—全日本フォークジャンボリーを事例として」, 東谷護 (編著) 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房, 245~275 頁。
- 永原 宣, 2014, 「《東京行進曲》から探る「アンクル」な日本の再発見」, 東谷護 (編著) 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房, 181~206 頁。
- ポープ, エドガー・W, 2014, 「日本のポピュラー音楽にあわられる「中国」—明清楽の変遷を手がかりとして」, 東谷護 (編著) 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房, 9~46 頁。
- 安田昌弘, 2014, 「文化のグローバル化と実践の空間性について—京都ブルースを事例に」, 東谷護 (編著) 『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房, 207~244 頁。
- 輪島裕介, 2014, 「「カタコト歌謡」から近代日本大衆音楽史を再考する」, 東谷護 (編著) 『ポピュ

『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』

ラー音楽から問う—日本文化再考』せりか書房, 47~79頁。

Middleton, Richard, 1990, *Studying Popular Music*, Buckingham: Open University Press.

*本書に収められた論考のうち、第1章、第2章、第4章、第5章は、成城大学グローバル研究センター主催による公開シンポジウム「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか—グローバルとローカルの相克—」(2012年1月開催)にて、第3章は「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか2—ローカルからグローバルへの逆照射—」(2013年1月開催)にて、それぞれ発表されたものを発展したものである。

(編集委員会)